

技術はある、事業計画もできた。足りないのは資金だけ。そんな起業家が頼りにするのが個人投資家（エンジェル）だ。米国では複数の個人が資金を出し、ベンチャー企業の揺らん期を支える。金融不況で起業家に逆風が吹く日本でも、個人の資金を投資事業組合（ファンド）の形に束ねて、起業を支援する動きが出始めた。

個人資金束ね起業家支援

「面白い。来週までに形

にしよう」「事業は難しい。もう一度挑戦だ」。毎週木

曜日、東京・目黒の市民バンク事務所は片岡勝代表

（52）の声が響く。集まった十人超の起業志望者に資金を提供する枠組みが、昨



年末設立のエンジェルファンド「エコ社会投資組合」（資金額一億円）だ。

代表は片岡氏とさわかみ投資顧問の沢上篤人社長（52）。大学教員や公認会計士のほか、片岡氏らも出資した。NPO（非



ウエルイント
ベストメント社長
浅井武夫

営利組織）活動に長く携わる片岡氏が重視するのは、収益性より社会の需要だ。米国でのエンジェルの役割は、自分の経験を生かし



NTVP
村口和孝社長

ベンチャー企業経営者など。経営ノウハウを「後輩」へ指南する。ウエルの浅井武夫社長（69）は昨年まで、通産省

エンジェルファンド奮闘

経験生かし 経営も指南 独立性前面に

て起業家に経営をアドバイスすること。片岡氏も木曜日の会議で、起業志望者が持ち寄った国際的なりサイクル会社や高齢者、障害者向け洋服リフォーム企業などの事業計画を肉付けする。「五十年後に必要な企業を自分たちの手でつくりだす」のが目標だ。

早稲田大学関係者らが設立したベンチャーキャピタル（VC）、ウエルイント（ベストメント（東京・新宿）は六月、三億円のファンドを設立する。出資するのは

た。「様々な知恵を結集するには幅広い出資が必要」との判断からだ。「起業家と二人三脚で成長を手伝いたい」と期待をかける。日本テクノロジーズ（NTV P、東京・文京）の村口和孝社長（41）は昨秋三億円強のファンドを設立した。村口社長は国内VC最大手のジャフコ出身。昨春、退社した。きっかけは休暇で訪れたイスラエル。ベンチャー関係者が「独立性」を誇りとする姿に衝撃を受けた。「法人から影響を受けない独立したキャピタリストを目指す」。帰国二日後に辞表を提出。独立性重

視へ出資者を個人投資家に限定したファンド設立へ向けて奔走した。村口氏の意気に感じた堀場製作所の堀場雅夫会長は二回会っただけで出資を承諾。百万円から一億円強の単位で資金が集まった。「説明すれば資金を出してくれ」るエンジェルは確実に増えている。という。米国ではベンチャーファンドの運用額のうち、エンジェル出資分は二割近いといわれる。日本でも増えれば、企業主体だった日本のベンチャー金融に新風を吹き込むきっかけになる。（中堅・ベンチャー企業部長 長尾久嗣）